

ドクターNAKAMURAの 健康道場



Vol.60
タバコと決別

「あなた、今日の健診どうだった？」

「・・・」

「やだ、だまりこくっちゃって。」

「・・・・・・・・」

「どうしたのよ、顔色も悪いし、まさか！」

真紀が両手で頬と口を被っている。

「癌だって」

意外と口からでた言葉はサバサバしていた。あれほど帰宅の途中では恐怖に慄き、世界中の不幸を全てしよい込んでしまった悲劇のヒーローかのように自分を偶像化していたが今、自分の口をついて出てきた言葉は、意表を突かれるほどに軽かった。

「えっ！本当。」

真紀の表情が刻一刻と変化していく様子が、私の銀幕という脳の深いところにあるスクリーンに映し出されていく。

「タバコ？、タバコが原因なの？」

恐る恐る問いかける真紀。

私は肯定も否定もしないまま、はるか遠くを見つめていた。

「だから、言ったじゃない！ タバコ止めてって。あれほどお願いしたのに。」 追い打ちをかける真紀。

でも、決して真紀を責めるつもりはない。だって、ついさっきまで、自分も同じようにパニック状態になっていたのだから。

二人の間を無言の長い時間が過ぎていく。

思えば四半世紀、タバコとは長い付き合いだった。苦しい時、悲しい時、嬉しい時、常に傍にはタバコがあった。思えばタバコは我が人生の朋友と言っても過言ではあるまい。裏切るようで申し訳ないが、明日私は病院へ行く。そして、病院へ行ったが最後、私はタバコと縁を切る。いや、切らざるを得ない状況に追い込まれるだろう。不思議なものだ。ここまで、自分で意思決定できるのに依存症とは。

「あなた、今からでも遅くないからタバコを止めない？」

言うまでもない。もとより私もそのつもりだ。

力なく小さく頷いてみせた。

そよかぜ 循環器内科・糖尿病内科
(県立中央病院 前)

院長 中村陽一